

## 模擬保育形式の授業における学生の体験

— 運動遊びの実践を通して —

### Students' experiences during a mock lesson simulating childcare :

Through the practice of physical activity

桐川 敦子<sup>1)</sup> 櫻木 真智子<sup>2)</sup> 黒澤 寿美<sup>3)</sup>  
望月 久也<sup>4)</sup> 森田 陽子<sup>5)</sup> 梁川 悦美<sup>6)</sup>

*Atsuko KIRIKAWA, Machiko SACRAGI, Sumi KUROSAWA  
Hisaya MOCHIZUKI, Yoko MORITA and Etsumi YANAGAWA*

#### Abstract

This paper aims to identify the effectiveness of a lesson based on active learning that is regularly practiced for preschool teacher training. A class of “Childcare Contents Teaching Method II (Health)” of B University discussed a lesson that involved group work for simulating childcare under the theme of teaching through exercise play, with students undertaking the roles of a care provider and/or a child. Students' experiences during the lesson were clarified, and the findings were compared with the results of the previous study by Kirikawa (2017) for discussion. Kirikawa's study was conducted in the same context as the present study and reported the effectiveness of the lesson conducted with children from A University-affiliated kindergarten as participants.

Analysis of the descriptions provided by the participating students revealed that they were committed to utilize their learnings from previous classes and “put themselves in the children's place” during the lesson, in either the role of a care provider or a child. In the previous study, the students engaged in joint activities with children and were considered to have grown while learning from children. In the present study, the students learned and acquired an “inquiring” mind, which is a prerequisite for preschool teachers by working from the children's viewpoint.

**Keywords :** *Preschool teacher training, active learning, mock lesson, Grounded Theory Approach (GTA)*

### I. 問題の所在と研究目的

政府主導の下、女性の社会進出が推し進められており保育への社会的要請が非常に高いことは周知のとおりである。一方急激な社会変化の下、幼児の育ちに影響を及ぼす様々な問題が生じており、課題に対応するため、保育者の資質や専門性の向上が求められている。養成の段階においても対応が必要となっているが、今日的な社会の状況下で育ってきた学生たちには、保育を構想し実践していく能力が不足しているといった指

摘もある。

文部科学省は、高校までの勉強から大学教育の本質である主体的な学修へと知的に跳躍すべく、学生同士が切磋琢磨し、刺激を受け合いながら知的に成長することができるよう、課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)といった学生の思考や表現を引き出しその知性を鍛える双方向の授業を中心とした質の高いものへと学士課程教育の質を転換する必要があるとしている。アクティブ・ラーニングとは、文部科学省の定義(中央教育審議会用語集2012)によれば、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者への能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法の総称」とされており<sup>5)</sup>、グループディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどがあげられる。上記の指摘及びこのような課題により、保育者養成校に

1) 日本女子体育大学 准教授  
2) 聖徳大学短期大学部保育科 教授  
3) 環太平洋大学短期大学部人間発達学科 教授  
4) 日本女子体育大学 教授  
5) 日本女子体育大学 准教授  
6) 東京家政大学 家政学部 准教授

においても様々な授業研究が行われている。より良い養成のために授業研究を積み重ねることは我々養成側の責務といっても過言ではなからう。

本研究は、保育者養成校において実践されているアクティブ・ラーニングを取り入れた授業効果について探ったものである。すなわち B 大学の「保育内容指導法 II (健康)」の授業において、学生が保育者役または子ども役を行い、運動遊びをテーマに模擬保育を行うといったグループワークを取り入れた授業を調査し、学生の体験を明らかにし、効果および課題の検討を目的とした研究である。安部 (2016)<sup>1)</sup>は、模擬保育の実践者が、保育者養成校の授業改善の手だてを目指しながら実践していることを明らかにしており<sup>1)</sup>、このことは養成校における具体的な模擬保育研究の積み重ねの必要性を示唆していると言える。また安部 (2016)<sup>1)</sup>は、模擬保育は学生が保育者役や子ども役などの役を行う他、実際の子どもと行う場合があるとし、いずれも人前で実践することに意義があると、その有用性について述べている。しかしながら両者の違いについては明らかにしておらず、この課題は、後述する桐川 (2017)<sup>2)</sup>における先行実践の課題とも一致する。本研究においては、実践の場面における対象が、子ども役の学生ではなく実際の子どもであった先行実践と比較しながら考察を行い、模擬保育の検討に資するものを得たい。

なお本研究は模擬保育における学生の体験に着目しながら調査を行うこととする。その理由は、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の子ども教育の在り方について」(2005)<sup>4)</sup>において言及された、今日的な社会状況の中で育った保育者には多様な体験が欠けていたり、保育を構想し実践する能力が不足しているのではないかという指摘から、大学生の体験活動の必要性が叫ばれており (松永他, 2012)<sup>3)(2)</sup>、体験の質について検討することの重要性が増していることと、そもそも幼児教育を学ぼうとする際に、体験することが大切であるという説があることからである<sup>3)</sup>。

## II. 先行研究

保育者養成校における模擬保育に関する研究はこれまでもみられ、本調査対象授業と同様の運動遊びを通した模擬保育についてもその意義が示されている。櫻木 (2016)<sup>7)</sup>は、後述する本調査対象授業と同様の模

擬保育を短期大学の授業において実践し、終了後に実施した学生に対する質問紙調査および学生の学び・気づきについての記述を分析し、学生は体を動かして遊ぶ楽しさを味わいながら、多くの運動遊びを知り、保育者側、子ども側の立場に立ちながら、遊びの援助に必要な配慮について学ぶことができたと報告した。

また阪口 (2016)<sup>8)</sup>は、学生が模擬保育を行うために作成した指導案を分析し、運動遊びを用いた模擬保育は、領域「健康」および「人間関係」に関する内容を学習する上で、非常に有益であることを示唆した。これらの先行研究は、いずれも運動遊びをテーマとした模擬保育における学習効果を示しており、授業における有用性を明らかにしている。しかしながら実践場面における対象が、子ども役の学生である場合に限定した研究であり、対象が実際の子どもである場合の授業研究および学生が保育者役や子ども役などの役を行う場合と、実際の子どもと行う場合の比較検討を行った研究については寡聞にして知ることができない状況にあった。

そのような中、桐川 (2017)<sup>2)</sup>は、本調査と同様に、学生の体験に着目しながら、子ども参加の下に展開する模擬保育を検討し、その意義を示した。この研究は、A 大学保育者養成課程の専門基礎教育科目に位置づけられている子ども参加型授業 (子ども参加の下に展開する模擬授業)「運動遊び」の事例を通し、子どもと共同活動しながら活動する学生の体験の検討についての報告であり、本研究と比較しようとするものである。本調査対象授業と流れは同じであるが、実践の場面における対象が、子ども役の学生ではなく、大学附属幼稚園の3歳児から5歳児の幼児という点で異なる。桐川 (2017)<sup>2)</sup>は、後述する本調査と同様の研究方法、GTAを用いて、授業後の学生の記述「幼児参加型授業 (子ども参加の下に展開する模擬授業)において体験したこと」を分析し、表1の通り、<一緒に遊びを楽しむ><コミュニケーションをとる><共感する>等の特性、[親密な交流][共感][子どもに寄り添った対応]他等の概念、そして概念間の共通特性にもとづいて生成された【共感的交流】【創造的工夫】【新たな発見】の3カテゴリーを抽出し、中核となるコアカテゴリー<発想への驚き>を浮上させている。そして「学生が授業の中で子どもと関わることで、子どもたちの思いもよらない<発想への驚き>を体験し、そのことが子どもの主体性認知を生起させ、子どもとの活動中に主体性を引き出そうとする取り組みを鼓舞していた」と

表1 特性, 概念, カテゴリーの構成 (A 大学幼児参加型授業の体験)

カテゴリー	概念	特性
【共感的交流】	[親密な交流]	<一緒に遊びを楽しむ> <コミュニケーションをとる>
	[共感]	<共感する>
【創造的工夫】	[子どもに寄り添った対応]	<子どもに寄り添った対応>
	[多様な活動を引き出す]	<主体的な活動を引き出す> <遊びの環境構成>
	[自由性の尊重]	<自由遊びの大切さの自覚>
【新たな発見】	[新たな発見]	<発達段階を理解>
		<興味・関心を知る>
		<発想に驚く>

し、「斯かる体験は子どもの立場に立つ保育観への転換に大きな影響を及ぼすものであった」と述べた。子ども参加型授業（子ども参加の下に展開する模擬授業）の意義を示したのである。

しかしながらこのような実践は有意義であるものの、授業においてその機会を得ることは困難であるとの声もあり<sup>(4)</sup>、学生が子ども役や保育者役を行う形式を選択するという状況も多い。その授業を展開する際に、対象が実際の子どもの場合との違いについて捉えておくことは授業担当者にとって重要なことであり、比較検討に着手することは必要なことであった。

### III. 調査対象となる授業の概要

#### 1. 授業科目名「保育内容指導法Ⅱ（健康）」及び模擬保育の位置づけ

本科目は4年制B大学2年次の秋学期に開講されている。授業担当者は著者の一人である。1年次の「保育内容総論」「保育原理」等の基礎の学びを基盤に、幼児教育を探究するための授業として位置付けられている。健康の保持増進について実践的に考究し、周りと協働しながら子どもや家庭、地域の健康課題を多面的に捉え、主体的に問題解決できる力が育つことを期待している。

本科目においては、春学期に開講されている「保育内容指導法Ⅰ（健康）」の学びをもとに、15回の授業のなかの3回を運動遊びをテーマとした模擬保育形式の授業とし、上記の授業目的、とりわけ周りと協働しながら子どもの健康の保持増進に役立つ運動遊びの実践

を行い、その中において保育者としての課題を捉え、解決のための手がかりを探ることを目指している。

#### 2. 模擬保育の流れ

##### (1) 運動遊びの計画立案

担当教員は、受講学生約35名を6グループ（1グループ5～6名）に分け、グループごとに、以下に示す7項目について話し合いをさせ、運動遊びの計画表としてA4用紙1枚にまとめることを指示している。①運動遊びのタイトル、②対象年齢、③運動遊びのねらい、④運動遊びの内容と展開、⑤工夫したこと、⑥この遊びのおもしろさ、⑦保育者の援助。

##### (2) 模擬保育形式の運動遊びの実践

###### 1) 実践方法

発表グループが保育者の役割を担い、他の5グループに属する学生約30名は子どもとして運動遊びに参加する形式をとっている。保育者役メンバーの役割分担についてはそのグループに一任されている。すなわち1人の学生が主たる保育者となっても、保育者役を交代で実施しても良いこととしている。

###### 2) 実践の流れ

模擬保育を取り入れる回の授業は以下の流れで、実技室において行っている。

- ① 発表グループは、運動遊びのタイトル、対象年齢、ねらいを全ての学生に伝える。
- ② 運動遊びの実践(約15分)（1回の授業の中で2グループが15分の実践を行っている。）
- ③ 実践後、発表グループは「工夫したこと」、「この遊びのおもしろさ」、「保育者の援助」について全員

に伝える。

④ グループワーク（グループごと）（約15分）

実践終了後、周りと協働しながら子どもの健康の保持増進に役立つ運動遊びの実践を行い、様々な問題を主体的に解決することができたか、などを考慮しながらグループごとに意見交換を実施している。保育者役として発表したグループは自分たちの実践を振り返り、子ども役として運動遊びに参加したグループの学生も、保育者の視点および、子ども役の実験から「良かったところ・参考になったところ」「改善したほうが良いと考えたところ」などについて話し合っている。

⑤ 全体発表（約15分）

グループで話し合いのあと、その内容を全体の場で発表し合い、共有している。

## IV. 研究方法

大学における授業実践を分析する方法は、保育所・幼稚園から高等学校の保育、授業実践の分析方法と同様に、必ずしも確定されていない。しかし近年、看護学研究に代表されるように、いわゆる質的研究法による分析方法の研究蓄積は著しいものがある（戈木2004, 長2005など）。授業の実践研究においては、授業で展開される対象者の活動を丹念に考察し、そこから理論的仮説を生成する解釈学の方法が分析にリアリティ感が得られ理論仮説の有効性が認められている。本研究においても、看護学研究の分野などで成果を蓄積している B.G. Glaser と A.L. Strauss の Grounded Theory Approach（以下 GTA）を採用する。

サンプルは B 大学「保育内容指導法II（健康）」2017年度受講生35名である。データは15回の授業終了後に記入した模擬授業学習体験の自由記述である。記述に際しては無記名とし、各人のプライバシー保護に配慮することを説明し、「模擬保育で体験したこと」を自由記述するように依頼した。

分析の手順は以下のとおりである。まずデータを意味文脈に即して切片化し、これを意味内容の類似性にもとづき分類整理し、特性（property）を抽出した。この特性を比較分類し共通の特性を識別しながら概念（concept）を生成した。続けて概念間の共通特性にもとづいてカテゴリー（category）を生成した。次に以上のカテゴリー間の関連を検討することによって、斯かる関係の軸となるコアカテゴリー（core category）

を生成し、概念、カテゴリーの関連性をストーリーラインとして作成し、理論仮説を生成する。以上のコーディングにあたり、特に切片化・特性・概念・カテゴリーの生成にさいしては分析者である筆頭著者が、授業担当者を含む5名の著者と検討し、その実際とのフィット感を確認した。また GTA の操作および各特性・概念・カテゴリーの妥当性については GTA で博士の学位を取得した研究者、奥村直子先生のスーパーバイズを受けた。

なお筆頭著者は、授業担当者に対し聞き取り調査を行い、授業の詳細について情報を収集したうえで分析を行った<sup>6)</sup>。

## V. 結果

分析の結果、学生の、「保育内容指導法II（健康）」における模擬保育の体験の特性として次の12特性が生成された。

— <遊びを楽しむ> <運動量の多さを実感> <年齢に応じた様々な遊びの体験> <言葉かけの大切さを実感> <説明の難しさの理解> <予期せぬことへの対応> <遊びの発展のための指導> <遊びのための環境構成> <安全への配慮> <子どもたちから見られる立場であることの自覚> <保育者としての立ち居振る舞い> <日頃から気を付けようとする意欲>—。斯かる特性より7概念が生成された—[遊びの楽しさの実感][多様な遊びの種類の理解][言葉かけの重要性の理解][臨機応変な対応][環境構成][保育者としての立場の理解][日々の生活の見直し]—。そしてここから【多様な遊びの体験】【保育方法の探求】【保育者としての立場への自覚】の3カテゴリーが生成され、さらにカテゴリー間の関連を検討した結果、この3カテゴリーの中核となるコアカテゴリー—<子どもの立場を考える>が生成された。表2は特性、概念、カテゴリーを一覧にしたものである。なお特性を< >, 概念を[ ], カテゴリーを【 】、コアカテゴリーを<< >>, ローデータは「 」で示す。なおローデータは学生の言葉のまま記すこととする。

### 1. 模擬保育における体験に関するストーリーライン

学生たちは、子ども役、または保育者役を行い遊ぶ活動において、常に<<子どもの立場を考える>>試みをしていた。そしてそれぞれの役において【多様な遊び

表2 特性, 概念, カテゴリーの構成 (B 大学模擬保育の体験)

カテゴリー	概念	特性
【多様な遊びの体験】	[遊びの楽しさの実感]	<遊びを楽しむ> <運動量の多さを実感>
	[多様な遊びの種類を理解]	<年齢に応じた様々な遊びの体験>
【保育方法の探求】	[環境構成]	<遊びのための環境構成> <安全への配慮>
	[臨機応変な対応]	<予期せぬことへの対応> <遊びの発展のための指導>
	[言葉かけの重要性の理解]	<説明の難しさの理解> <言葉かけの大切さを実感>
		<保育者としての立ち居振る舞い> <子どもたちから見られる立場であることの自覚>
【保育者としての立場への自覚】	[保育者としての立場の理解]	<保育者としての立ち居振る舞い> <子どもたちから見られる立場であることの自覚>
	[日々の生活の見直し]	<日頃から気を付けようとする意欲>

の体験】をしていた。遊びの中で、子ども役、保育者役いずれにおいても、子どもの活動に応じた保育者の適切な対応の必要性を感じ、様々な問題を解決するための【保育方法の探求】に主体的に取り組んでいた。《子どもの立場を考える》ことを試みながら探求することで【保育者としての立場への自覚】を得ることも繋がっていた。《子どもの立場を考える》ことは、保育者としてのあり方および保育方法について検討しようとすることを鼓舞していたと言えよう。

## 2. カテゴリーの説明

### (1) 【多様な遊びの体験】

学生たちは、子ども役および保育者役を行いながら、子どもの健康の保持増進に役立つ体を動かすたくさん<遊びを楽しむ>ことができた。「走り回って遊ぶことは楽しいがとても疲れる」と<運動量の多さを実感>したが「体を動かすことは疲れるけれど楽しいこと」であり、[遊びの楽しさの実感]が得られた。「子どもの目線に立つことで改めて純粋に体を動かすことの楽しさを学んだ」のである。各く年齢に応じた様々な遊びの体験>をし、[多様な遊びの種類を理解]をした。

次のようなローデータが見られた。

「走り回って遊ぶことは楽しいがとても疲れる」  
「体を動かすことは疲れるけれど楽しいこと」  
「子どもの目線に立つことで改めて純粋に体を動かすことの楽しさを学んだ」「年齢に合わせた設定の

大切さを学んだ」「同じ遊びでも年齢によって発展させることで発達につながる事が分かった」  
「運動遊びの授業を通してたくさん遊びを知ることができた」「子どもの立場で遊ぶと新しい発見があった」

### (2) 【保育方法の探求】

学生たちは、実践を通して「頭で考えるのと実際にやってみるのでは全然違う」と感じた。「少しのことでトラブルや事故が起きてしまうため常に周りを見て配慮しなければならない」。<安全への配慮><遊びのための環境構成>が重要であることを学んだ。[環境構成]を整えていたつもりでも<予期せぬことへの対応>が必要になることがある。<遊びの発展のための指導>には[臨機応変な対応]が必要であった。さらに学生たちは保育者として「1つの遊びに対して配慮すること、注意することはたくさんあって、その中で幼児の体を動かしたいという気持ちを引き出していくことを学んだ」。そのための<説明の難しさの理解>や<言葉かけの大切さを実感>した。そのことは、保育者役においても実感したし、説明を受ける側の子ども役においても感じ、対策を試みようとしていた。

次のようなローデータが見られた。

「頭で考えるのと実際にやってみるのでは全然違う。なわりレーをしてなわを低くしたらみんな言うようにくぐると思ったらスライディングする人が多くてびっくりした。」「少しのことでトラブルや事故が起きてしまうため常に周りを見て配慮

しなければならない」「1つの遊びに対して配慮すること、注意することはたくさんあって、その中で幼児の体を動かしたいという気持ちを引き出していくことを学んだ」「遊びはケガにつながりやすいためしっかりと保育者は確認し安全の配慮をすること」「幼児にはどのような説明の仕方があっているのか、幼児の目線で考えることができた」

### (3) 【保育者としての立場への自覚】

学生たちは、子ども役として保育者役の学生と対峙した際、<保育者としての立ち居振る舞い>や表情が気になった。そして保育者は<子どもたちから見られる立場であることの自覚>をし、[保育者としての立場の理解]をすることができた。そして立ち居振る舞いや表情について<日頃から気を付けようとする意欲>を持ち、[日々の生活の見直し]を行うに至った。

次のようなローデータが見られた。

「保育者は元気に自信をもって接すると子どものモデルとして格好がよい」「子どもたちに悪いところをまねされないように、物を置くときなども丁寧に行うようにすること」「保育者の立ち居振る舞い、日ごろからする」「子どもから見ると保育者がどのようにみえているのかがわかった」

### (4) コアカテゴリー<子どもの立場を考える>

模擬授業の中で学生たちは、子ども役、保育者役いずれにおいても、<子どもの立場を考える>を試みしながら【多様な遊びの体験】をしていた。その活動の中において、子どもの活動に応じた保育者の適切な対応の必要性を感じ、様々な問題を解決するための【保育方法の探求】に主体的に取り組んでいた。さらにその行為は【保育者としての立場への自覚】を得ることも繋がっていた。<子どもの立場を考える>ことは、模擬授業で学生たちが達成すべき課題、保育者としての課題を捉え、解決のための手がかりを探るための中核となる、導きのカテゴリーと考えられる。

## VI. 考 察

### 1. 実践場面におけるカテゴリーの現れ

上述のコアカテゴリー<子どもの立場を考える>で示した解釈が、実際の授業場面でのどのように読み取れるのかについて考察する。ここで取り上げる事例は、4歳児を対象とした「しっぽとり」の遊びに関する事例である。

保育者役の学生は、「しっぽとり」について子どもが理解しやすいよう、1回目は、子ども全員がしっぽをつけて、誰が誰のしっぽをとっても良いというルールとした。そして3人がしっぽをとられたら終了とした。そのあと、子どもを2チームに分け、一定の時間内に別のチームの子どものしっぽをとり合い、相手のしっぽを多くとったチームが勝ちという、チーム対抗戦を行うように計画した。保育者役の学生たちは子どもの立場を考えながら【保育方法の探求】を行っていたのである。子ども役の学生にとっては【多様な遊びの体験】となる。ルールの説明の際、子どもの立場を考えていなかった保育者役の学生が、思わず難しく、子どもに伝わりにくい言葉を使ってしまい、<説明の難しさの理解>をすることがあった。子ども役の学生から「対抗戦ってなに？」と投げかけられたのであった。<子どもの立場を考える>ことを試みながら参加していた子ども役の学生からの発言であった。この問いに、保育者役の学生も改めて<子どもの立場を考える>ことを行い、各チームにうさぎさんチーム、くまさんチームと名前を付けるなどしながら、ルールについて見本を示し、優しく丁寧に説明し直すなど、さらなる【保育方法の探求】を行い、[臨機応変な対応]をとった。また、2グループに分かれる際にも困難が生じたが、各グループに一人ずつ学生が立ち、目印の役割を示すと、スムーズに分かれて並ぶことができた。さらに、実際に実践してみると子どもにとって予想以上に運動量が多いことがわかり、狭いところではぶつかってしまうので、広い場所の確保が必要であることがわかった。遊びによって<安全への配慮>をした[環境構成]が必要であることを理解していた。すぐに周りにあったものを移動させるなどその時にできることを考えながら対応した。上記のような実践を通して、<子どもの立場を考える>ことを試みながら参加していた子ども役の学生は、保育者役の学生と関わりながら、保育者の言葉や表情、立ち居振る舞いについて様々な印象を受けていた。保育者が元気に笑顔で応対する方が子どもが安心して遊べるということは、保育者役の学生も感じ、双方が、保育者とは<子どもたちから見られる立場であることの自覚>をせねばならないと【保育者としての立場への自覚】をし、日頃より気を付けようとする気持ちが芽生えた。

この活動場面において気づくことは、学生たちが子ども役、保育者役いずれにおいても<子どもの立場を考える>ことを試みながら【多様な遊びの体験】をし

ていることである。そしてその中で生じた様々な問題解決に向けて【保育方法の探求】を行っていたのである。さらに両立場で活動する中で、保育者の言葉や表情、立ち居振る舞いについての課題も捉え【保育者としての立場への自覚】をし、解決するための手がかりを考えていた。

以上の考察に基づくと、模擬授業において学生たちが《子どもの立場を考える》体験したことは、保育者としての課題を捉え、解決のための手がかりを探るために意義ある体験であったと考えられる。

## 2. 子ども参加の下に展開する模擬授業における体験との比較、検討

ここでは桐川 (2017)<sup>2)</sup>の、大学の附属幼稚園の子どもの参加の下に展開する授業の研究結果と比較しながら、本調査対象である模擬授業における学生の体験について考察を行う。

桐川 (2017)<sup>2)</sup>は、本研究と同様に授業後の学生の記述をGTAを用い分析し、《一緒に遊びを楽しむ》《コミュニケーションをとる》《共感する》他等の特性、[親密な交流] [共感] [子どもに寄り添った対応] 他等の概念、そして概念間の共通特性にもとづいて生成された【共感的交流】【創造的工夫】【新たな発見】の3カテゴリーを抽出し、中核となるコアカテゴリー《発想への驚き》を浮上させた。これらの特性および概念、カテゴリーは、子どもとの共同活動の中において生じたデータから生成されたものであることが読み取れる。学生は子どもの立場を『子どもから学ぶ』体験をしていたと言えよう。

一方本調査結果においては、子どもが実在しない場面で、模擬保育を成立させるため、授業の中で学生たち自身が《子どもの立場を考える》試みに力を尽くしていた。子ども参加の下に展開する授業実践において学生たちは、子どもの立場を『子どもから学ぶ』体験をしていたが、本研究で取りあげた実践においては、学生たちが、子どもの立場を『探求する』体験をしていたのである。子ども役の際に「子どもはこんな時こう考えるのではないかと考えた」り、保育者役の際に子どもの姿を想像しながら「子どもにわかりやすい話し方を考えた」り、「どうしたら子どもが安全に楽しく遊ぶことができるか考えた」り、それまでの授業において学習した知識を用い、《子どもの立場を考える》ことを試みながら【保育方法の探求】に主体的に取り組んでいた。さらに「子どもから見たら言葉遣いの良

い保育者の方が良かった」などの記述もあり【保育者としての立場への自覚】を得ることにつながっていたと考えられる。学生たちが子どもの立場を考えようとするに、困難を有することもあるかもしれない。学生の考えが及ばないことや深化に至らない場合もあると推測される。また子どもが参加する授業とは異なり、思い描いた子どもの姿と実際の子どもの姿の間に実は齟齬が生じていることもあろう。しかしながら、子ども役および保育者役両方の際に子どもの立場を考ながら活動することにより、保育者として必要である『探求する』姿勢を学び得ることができ、その姿勢は『子どもから学ぶ』姿勢と同様に保育者になってから大きく役立つものとなり得よう。

## VII. 本研究の成果と今後の課題

保育者養成校における授業研究は、冒頭で示唆したように、各大学等で検討されていると予想されるが、多く見いだすことはできていない。その理由の一つとして、実践研究のアプローチの未開拓に起因していることが挙げられよう。実践研究は開発研究の性格を有するものであるが、学界および教育界でその成果が共有され論議されるためには、追試可能な方法論をとまった理論ないし仮説検証が求められる。本調査はGTAを活用し、一定の成果を示すことができた。

本研究は、実際の子どもの参加が不可能であり、学生が子ども役や保育者役を行い展開される模擬保育において、学生たちが模擬保育を成立させるため、《子どもの立場を考える》試みに力を尽くしていたことを明らかにした。子ども参加の下に展開する先行実践における学生たちは、子どもの立場を『子どもから学ぶ』体験をしていたと報告されており、学生が子ども役や保育者役を行う模擬保育と実際の子どもの対象とした模擬保育における体験の違いを明確に示すことができた。後者の方がより確実な学びとなることが予測され、前者の授業担当者はその点を考慮する必要がある。しかし学生が子ども役や保育者役を行い展開される模擬保育においては、保育者として必要な『探求する』姿勢を体験的に学び得ることが可能であり、子ども参加の下に展開する模擬保育において学生が体験していた『子どもから学ぶ』姿勢と同様に、保育者になってから大きく役立つものを得られることが予測される。このことは、学生が子ども役や保育者役を行い展開される模擬保育の意義であると言えよう。

しかしながら以下のような課題がある。第1に、模擬保育の授業開始と終了時の変化を確認することが必要である。また、他年度の学生についての調査や他授業における模擬保育の効果の調査を行い、データを積み重ねていく必要がある。

#### 注

- (1) 安部(2016)はCiNiiに収録されている模擬保育に関する41件の論文から、機関リポジトリ及び学会掲載論文と、一部保育者養成校の論文17件を分析し、模擬保育の意義について検討している。その中で授業実践者は学生に、模擬保育を通して保育者としての実践力や意識を高めることをねらいとし、保育者養成校の授業改善の手だてを指しながら実践していることなどを報告している。
- (2) 松永由弥子・塚本博之・岩崎功らは、大学生の体験活動の現状と課題について調査についての論文の中で、教職課程教育においても指導力を備えるために体験活動を行うということが望ましいと述べている。
- (3) 浜口順子は「新しい時代の幼児教育」(小田豊・榎沢良彦編)の中で、「方法を学ぶより、まず体験する」ことが大切であると述べている。
- (4) 先行研究において取り上げられた実践は筆頭著者による先行実践であり、課題も把握している。
- (5) 授業担当者は、取得したデータを筆頭著者が中心となって分析を行い、結果を執筆し、本紀要において報告することに同意している。

#### 引用文献

- 1) 安部アサミ(2016)保育者養成校における実習に関する研究—模擬保育の意義に着目して—, 白鷗大学教育学部論集2016, 10(1), pp.263-276.
- 2) 桐川敦子(2017)保育者養成課程の授業において子どもと共同活動する学生の体験に関する実証的研究—学生による子どもの主体性認知と、主体性を引き出す取り組みに注目して—, 保育教諭養成課程研究第3号, pp.29-40.
- 3) 松永由弥子・塚本博之・岩崎功(2012)大学生の体験活動の現状と課題, 静岡産業大学情報学部研究紀要(14), pp.243-263.
- 4) 文部科学省(2005)中央教育審議会答申「子どもを取り

巻く環境の変化を踏まえた今後の子ども教育の在り方について」

- 5) 文部科学省(2012)中央教育審議会用語集, p22.
- 6) 阪口将太(2016)領域「健康」および領域「人間関係」から見た体育授業における運動遊びを用いた模擬保育の位置づけ, 聖和短期大学紀要第2号, pp.11-16.
- 7) 櫻木真智子(2016)保育専門科目に実践を取り入れることによる学びに関する報告—「保育内容・健康」に模擬保育形式の運動遊びを導入することの効果为例として—, 聖徳大学研究紀要 聖徳大学第27号聖徳大学短期大学部第49号, pp.127-134.

#### 参考文献

- 長佳代(2005)「小児腎移植後患者の思春期における療養行動の変化と関連する条件」日本看護科学会誌J. Jpn. Acad. Nurs. Sei. Vol. 25, No. 2, pp.3-11.
- 増井三夫(2010)実践場面の質的研究法入門 Grounded Theory Approach (GTA) の理論と実際, 上越教育大学大学院2010年研究室年報, pp.1-98.
- 溝上慎一(2014)「アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂.
- 中井俊樹(2015)「アクティブ・ラーニング(シリーズ 大学の教授法)」玉川大学出版部.
- 小田豊・榎沢良彦編(2014)新しい時代の幼児教育, 有斐閣アルマ.
- 戈木クレイグヒル滋子他(2004)「闘病という名の長距離走病名告知をうけた小児ガンの子どもの闘病体験」看護学研究 Vol. 37, pp.69-85.
- 若尾良徳・岡部佳子・桐川敦子・目良秋子・佐藤有香・後田紀子(2015)保育者養成課程の講義科目における授業の課題および授業方法の実態—保育者養成課程の教員へのインタビュー調査—, 保育教諭養成課程研究, 1, 27-40.

(平成29年11月27日受付)  
(平成30年1月17日受理)